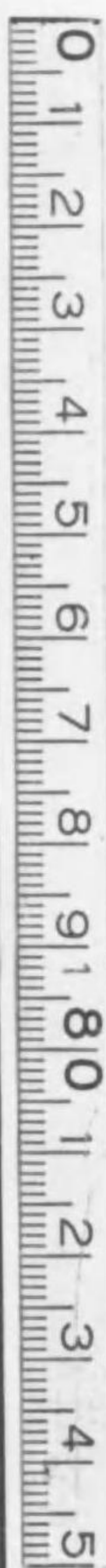


特 258

673

安宅

昭和改訂版
内二十



始



安宅

(梗概) 源の義經兄頼朝に疑はれ辨慶以下十二人の主従作り山伏とあつて都を落ち奥へ下りけるが、やがて富樫某の守る加賀の國安宅の新關にかゝり辨慶の指圖よて義經を剛力の姿に装はせ笈を肩にかけ遙か後ろに下りて關を通らんとし一同は南都東大寺勸進の山伏と偽はりしも關守の許さざるより態と最後の勤めをなし又た關守の勸進帳を所持するやといひにあらぬ往來の巻物を開いて勸進帳なりと讀み上げ、尚ほ剛力姿の義經の見露はされんとするよて散々に打擲するなど様々な苦難を経て辛うして關を通りぬ、安堵の思ひをなして主従感懐に耽りぬし處へ關守來りしより辨慶舞ひを舞ひなどしなむら心ゆるすなとはり虎の尾を踏み毒蛇の口を脱るる思ひして陸奥の國へ急ぎける。



シテ 武藏坊辨慶
 子方 源義經
 ツレ 同行山伏八人
 又八十人
 ワキ 富樫 某
 所 加賀國安宅關
 季 春

安宅

^{わき}詞是ハ加賀國安宅の淺^{コト}ふ富樫の何
 某に^{コト}いひ^上相と^上頼朝某の^上経法中不和
 小あ^上せ^上給ふより判友殿を十二人の
 作^上り山伏と成^上て奥へ^下降下向の^上より
 頼朝^上ツレ及^上び某國^上より新園を^上ま^上と

山伏を堅く登り中せとの山事よめてい
去下間はあをい某承て山伏をとも中い

今日も望く申付あとおねいセリフ有

立次方旅の衣いまをかきのくやあけき神あ

志るる後上まうめんいとおふき都の

卯上此旅む日とも急こ此城路の末思ひ

やふし持て急なま上おは候の人ごまを

伊勢乃三郎駿河の二市片岡増尾

常陸坊して弁若あ先達の深安と成て

ま立宛後以上十二人連吟いまごおぬ旅のめお

のすゝ急を話おねをいふお物ていつまは

限りも急あやお急の杖話此まよ急人中

上

時トキも比ヒも二月ニツキかク衣イ更マるルもモ十日トカ

中ナカ夜ヨ月ツキ乃ノ都トをヲ立タ出デくクはハ是コノ夜ヨけケはハもモ

返ヘるルもモ別ワれレまマいイくク心ココロもモ志シらラぬヌもモ

急イサ坂サカのノ山ヤマろロくクまマおオれレをヲまマまマらラぬヌめメいイねネ

くク浪ナミ路ヂ途ツにニ行イくク海ウミ乃ノ貝ガイ

津ツのノ浦ウラよヨもモふフらラりリ志シのノめメをヲやヤくクおオけケ

行イくクもモあアさサ茅チガハ交カ付ヘ荒アラ乳ニ山ヤマ上のノ海ウミ

交カ居イ久クしシきキ神カミ垣ケやヤ松マツのノ木キ乃ノめメ山ヤマ松マツ

行イ先サキよヨんンこコたタるル松マツ山ヤマ人ヒトのノいイまマもモ海ウミ

深フカ北キタのノあアさサいイあアのノちチやヤ来キらラこコ國クニのノ深フカをヲあアはハるル

若ワカ乃ノ松マツ原ハラはハいイまマもモせセくクみミびビくク嵐カミのノをヲ

あアしシたタらラ花ハナのノ安ヤス室ムロよヨもモあアふフらラりリ

此急レ山程ノよ安ニ宅ノの漢ノよ流ル者ノみレくレ
 先ノうレうレくレ此ノ程ノいレうレにレ中ノ上ノにレ替レけ
 所ノよ滞レ休レみレふレまレるレまレてレ判友 いうレよレ舟
 考友 清レたレあレよレ判友 只今旅人の中ノこレ
 通リつル事ヲおシてレあるレうレいレやレ何カと
 承レさレいレ判友 あレ宅ノ漢ノよ新レにレ笑ハすレこレ

山ノ伏ヲ望ミてレ探ルふレとレ中ノしレまレ判友 言フ
 道ノ道ノあレをレ下ノ向ヲをレ存テこレらレるレ間
 とレ存ル是レもレ由リ一レたレはレ大ノ事ヲみレくレ
 間ノ皆ノ中ノ此ノ通リをレみレたレ真ニ志ニ
 中ノ者ノふレまレるレとレ判友 我等のレ存ルもレ
 何レ程ノ事ヲ此ノへレまレ只今歩破てレ通リ

あまらうしと存^レひ 佐の如くけり候しと
所^レ歩破^レては通り^レありふせむる^レ安^レた程
乃^レ此事^レに^レく^レしを^レ滞^レり来^レりは大事
ま^レく^レひ^レ只^レ何^レも^レも^レ無^レ事^レの^レ後^レ始^レる^レう
存^レひ^{判^レ友} 免^レも^レ角^レも^レ并^レ茶^レ計^レら^レひ^レ入^レ
思^レて^レは^{甘^レ茶}存^レひ^も 味^レ等^レを^レ始^レめ^レあり^レの

山^レ伏^レ皆^レい^レま^レつ^レく^レま^レい^レ山^レ伏^レま^レく^レひ^レと^レも
何^レと^レも^レ中^レで^レも^レは^レ安^レい^レは^レま^レは^レ座^レを^レく^レひ^レ忍^レ
ま^レま^レん^レま^レ中^レで^レも^レい^レく^レひ^レを^レは^レす^レ其^レを^レの^レけ
ら^レま^レい^レあ^レの^レ強^レ力^レが^レ肩^レに^レあ^レる^レは^レ及^レを^レそ^レと^レは
肩^レに^レ置^レれ^レ滞^レり^レま^レう^レと^レい^レま^レい^レら
ふ^レと^レ茶^レ計^レする^レ様^レよ^レく^レ我^レ等^レより^レ後

よむしちうしんは通りのゆらぐ仲こ人も何
 かー判友きかると存じ判友実をいれん
 七あーいけまのいのきまのまましく
 上て
 実やくれあゐの桂のよは桂もは
 なー立立強力はよもいと目をかきーと
 清藤を脱ぐこ。麻乃衣を清らぶ

強ひーしてあは強かり肩こは後を
判友義經取て肩よりを立立笈の上より角
 皮かゝるおえつけ判友後此言はよ
 顔をかゝー立立劉村はまの
判友木判友是いしげなる強力めて立立目上
 して歩むは有振ぞ痛ハー

我等よるま後よりさうつそく山通りゆへ
如中^{わき}に山伏達是の園めてゆへ 承ゆは
南都東大寺大佛供養の爲子國と
客僧をせよされゆへ山陸をばはお僧
承て山通りゆへ先まめ子涉入ゆへ
すめにも入ゆへ 去るうそ是を山

伏をふ限る留中園めてゆへ 其謂は
さん^{わき}の頼^上躬よへ 経法中不和よあ
せ給ふよま^上判友友は十二人の作り山
伏と成て果秀海を頼^上は下向れよへ
頼^上躬ゆへ及^上ま^上國^上よ新^上言^上をまえ
山伏を望く接ひ中せとの山事いそゆへ

去^ト留^レは^レ款^ヲを^バ某^ト承^テて[、]山^ノ伏^ヲを[、]ぬ^ル中^ノに[、]群^ル
 小^レ是^レハ[、]大^レ勢^ヲ以^テ在^ル也[、]留^ル一^人も^通一^中リ^留
 ぬ^ル也[、]一^{して}て[、]あ^ルぬ^ル也[、]更^ニ上^ルに[、]僅^ク山^ノ脚^ヲを[、]こ^リ[、]
 ぬ^ル也[、]と[、]信^ジ出^ス也[、]ま^キひ^ひつ^しぬ^ル也[、]誠^ニの[、]山^ノ伏^ヲを[、]も[、]
 留^ルも[、]あ^リふ^ルが[、]り[、]わ^かま^しぬ^ル也[、]さ[、]う[、]此^レに[、]今^ニは[、]留^ル也[、]
^上一^人も^通一^中リ^留ぬ^ル也[、]一^{して}て[、]ぬ^ル也[、]我^ノも[、]ぬ^ル也[、]も[、]

是^レよ[、]し[、]誅^ヲを[、]し[、]ま^しぬ^ル也[、]一^{して}て[、]中^ノの[、]
 事[、]一^{して}て[、]語^ヲを[、]新^クか[、]る[、]不[、]承^ニあ[、]る[、]也[、]
 承^レり^ては[、]物^ヲに[、]止[、]上[、]ハ[、]今^ノ初^メの[、]つ^とも[、]あ[、]る[、]
 初^メて[、]留^ル也[、]う[、]ろ[、]誅^ヲを[、]り[、]ま[、]し[、]ぬ^ル也[、]一^{して}て[、]ま[、]る[、]に[、]し[、]ひ[、]
 しか[、]留^ルの[、]いと[、]ば[、]を[、]結[、]り^ぬ也[、]一^{して}て[、]わ[、]か[、]ま[、]し[、]ぬ^ル也[、]
 一^{して}て[、]は[、]は[、]と[、]あ[、]り^ぬ也[、]一^{して}て[、]は[、]り^ぬ也[、]一^{して}て[、]は[、]り^ぬ也[、]

引上
掛

夫山伏といつたは彼の修業の室を此行義

をうけ 其の又不動の室の容

をかひてお つかんこといふも智れ

室の室より 十二因縁のひらきす

て裁きたし 九念の受茶の室の柿れま

掛 胎義黒一ちのまをきむは

して

あ又八目の室の室ハ 八義の蓮花

をぬまへるま 出入の室の阿の

二の室の室ハ 仏の山伏を

室にへて付留るん事 明王乃照

覧計の室難ふ 慧野権現の室

をあへん事 たち所よおめて

あ

七

くして二二三... 勤ひみへうく... 阿毘羅... んと珠救はくく... おもめを

進張の... 勅を張... を振ばされし... 勅を張

はよてい... 何と勅進張を讀めといや... 本よる勅を張とあふ... 勅進... 張と名付つ... たるかよ... 大恩教ま... 秋の月ハ澄潔乃雲よ隠れ生死長

東宮長子... 愛小中は帝... 聖武天皇... 夫人は別... 眼子有て... 美路子...
東宮長子... 愛小中は帝... 聖武天皇... 夫人は別... 眼子有て... 美路子...
東宮長子... 愛小中は帝... 聖武天皇... 夫人は別... 眼子有て... 美路子...

立事... 一みて後... 一兵の... 兵比乃... せん... 教...
立事... 一みて後... 一兵の... 兵比乃... せん... 教...
立事... 一みて後... 一兵の... 兵比乃... せん... 教...

モリス

...

人々肝を清く^上情を^下あ^上て通^下

けり^下く^下急^下で^下出^下通^下り^下り^下

心^下の^下中^下の^下山^下き^下い^下う^下は^下是^下成^下強^下力^下と^下ま^下れ^下と

一^下我^下く^下上^下す^下は^下五^下の^下君^下を^下い^下る^下也^下一^下む^下る^下

一^下勢^下は^下浮^下沈^下極^下の^下ぬ^下と^下皆^下一^下回^下は^下立^下極^下る^下

あ^下の^下誓^下あ^下を^下て^下い^下事^下を^下仕^下換^下ま^下る^下何^下連^下

あ^下の^下強^下力^下は^下通^下ぬ^下そ^下通^下ま^下と^下一^下我^下阿^下ま^下

ま^下げ^下方^下の^下り^下ぬ^下て^下い^下一^下ま^下の^下何^下と^下出^下通^下い^下

そ^下ち^下と^下人^下は^下似^下て^下い^下る^下あ^下と^下あ^下こ^下い^下

人^下が^下人^下に^下似^下ると^下ハ^下珠^下く^下一^下か^下ぬ^下俵^下う^下か

相^下論^下は^下似^下こ^下い^下そ^下判^下な^下極^下は^下似^下ると^下中^下

若^下乃^下い^下る^下後^下居^下れ^下る^下ぬ^下て^下い^下一^下は^下後^下を^下送^下

新判友成ふに於ける強力めハ一約の思ひ出
よる服ち好む目言くハ能みよとほそ
うはさると思ひひ一ふまづりの爰肩て後
よさうきびう人ともあや一むきあふけ
程母しへ一ふへ一と思ひ一にして拘
るせといへしん進金刺杖をおしこく

散らよ赤擲き通きと一我 わき下 何とち

ん一強ふた一人を通一申るあひ

や合力を留置爰よ目ををぬ給ふ 吐一
人きう那 目下 加こくハ何あ ヤア ぐり
程緒一き強力ハ太刀り一を抜給ふ
めだれぐ不の振舞 ヤア ハ能痛のふりか ヤア 十

一人の山伏は、歩刀抜りけり。男はかき
るを極は、いふなる天魔鬼神もおそれ
つる。その人へは、わかを比師ふを中
てひ、下多て出ぬりし。さしたの髪をい
抜群子程角ごころまで出る。先は、おま
以体之者ふまざるに、いふ中上ひ、先

よ、解りよ、難儀よひひ。程よ、ふまきの
働仕ひり、禾下是中、に家老の、清運つた
させ、孫ふよ、今、弁を、ぐ杖も、あ
た、せぬ、ふら、と、思へ、は、痛を、い
し、判友い、に、弁を、お、い、く、も、得
ぬる、物、が、唯、今、此、氣、持、更、よ、ん、ん、お、より

あつたはらふはす。只天の口かほとて我
思入^{コト}の考を我をあやしめ^{コト}生^{コト}涯^{コト}限り
ありつる所も、丸角の是^{コト}飛^{コト}をぶもんと
まして、唯謀の家人れ如く、あつたはらふ
我を助くる^{コト}是^{コト}弁^{コト}受^{コト}が謀^{コト}も飛^{コト}を八幅の
淨^{コト}託^{コト}言^{コト}と^{コト}思^{コト}入^{コト}ハ、糸^{コト}くそ^{コト}覚^{コト}ある^{コト} 史^{コト}

世に末世よ及ぶと^{コト}日^{コト}月^{コト}ハい^{コト}ま^{コト}地^{コト}
よ^{コト}飛^{コト}を^{コト}た^{コト}と^{コト}ひ^{コト}い^{コト}なる^{コト}方^{コト}便^{コト}なり^{コト}也^{コト}
ふ^{コト}一^{コト}き^{コト}ま^{コト}を^{コト}赤^{コト}杖^{コト}の^{コト}天^{コト}の^{コト}討^{コト}よ^{コト}あ^{コト}つ^{コト}
ぬ^{コト}る^{コト}や^{コト}あ^{コト}へ^{コト}ま^{コト} ^{本判友} ^{サシ上} 愛^{コト}や^{コト}現^{コト}を^{コト}の^{コト}果^{コト}を^{コト}見^{コト}
て^{コト}い^{コト}ま^{コト}末^{コト}末^{コト}を^{コト}あ^{コト}る^{コト}い^{コト}ふ^{コト}事^{コト} ^日 今^{コト}み^{コト}
志^{コト}し^{コト}ま^{コト}て^{コト}乃^{コト}上^{コト}よ^{コト}夏^{コト}年^{コト}月^{コト}の^{コト}衣^{コト}更^{コト}更^{コト}若^{コト}
^キ ^サ ^ラ ^キ

や下の十日のなふれ籠を遁きつるお
そゆ一たなきして只さふぐに十余人
多れさめたる心地して互に面を合せ
は泣斗たるを拒哉下曲抱るに家經
弓馬の家よ生れ来と命を頼船よ
幸りかたを西海の波よ沈め山壁海

岸よ起仰めまき武士の鑑れ神枕片
一く隙も波乃上ヤア或時ハ船よりかみ
風波よ身を任せ或も山平有馬
諦も見ぬ音れ中よ海まこ一阿る夕
波乃立ち侍者や酒戸明るのとかく
三年れ程もなく敵を亡一廢く世

中ては先かうは通りのは(わき)心持中の

一して
實は是も心持のうの人の情乃又盡す

受て心を成らんを是に付ても人に

引上
心かくれそ是服とま 日 あり

を面こと并きまはつたありまては山陰の

一をとりよさいと園居一と所も山

一ては酒を呑みよ 面白や山あり

月
くをううては流はまると水乃

手先成る神ありていさや舞をまふ

よ本より并きまはつた塔のお僧まい延を

乃時乃和宗是成山水乃 落く岩よむ

びくしそ 鳴瀬の水 先きおぬふ糸

里てい^{わき} いうよんを二指^し以舞^りゆ

目下^の水舞^上あるも瀧乃^{あり}あり

目上^の日^の思^ひもた^すと^あり^くと^く

お^のた^きや^な珠^の弓^の心^もも^たる

舞^の人^と喉^中て^はく^まと^く後

を^おつ^取肩^も赤^りき^く席^は尾^をも^たる

毒^の口^は残^乃が^まる^るん^地一^く陸

一^く陸^の口^は残^乃が^まる^るん^地

一^く陸^の口^は残^乃が^まる^るん^地

昭和九年十二月廿五日印刷
昭和九年十二月三十日發行

定價金五拾錢

著作權所有



東京市下谷區上根岸町八十二番地

著者 寶生新

東京市京橋區銀座西六丁目三番地

發行兼印刷者 江島伊兵衛

發行所 下掛寶生流謠本刊行會

終

